

戦後改革期におけるコア・カリキュラムの開発研究 —東京学芸大学附属小学校の「複合型カリキュラム」—

水原 克敏

序 課題と方法

学習指導要領は、1947（昭和22）年の経験主義から1958（昭和33）年改訂では系統主義に転換されるが、この過程で、文部省実験学校では、全国の学校に導入すべきカリキュラムについて多種多様な開発が進められていた。文部省実験学校は約20校に及ぶが、本稿では、東京学芸大学附属小学校（世田谷小学校）の「複合型カリキュラム」への開発過程を分析する。同校のカリキュラム開発は2期に分けることができ、第1期はコア・カリキュラムの開発が中心で、第2期は「複合型カリキュラム」へと至る。同校は、コア・カリキュラムと教科カリキュラムとを実験し、両者の長短を研究の末に、経験と教科とを機動的に接合する「複合型カリキュラム」に行き着く。ちなみに東京高等師範学校附属小学校の場合は、コア・カリキュラムと教科カリキュラムとの中間に位置づく「広域型カリキュラム」が結論であった¹。「広域型カリキュラム」はコア・カリキュラムの修正版であるのに対して、「複合型カリキュラム」は教科カリキュラムの修正版である。

第1章 カリキュラム開発の基本方針

教育課程の基準が戦前の国定から「試案」へと転換されたことで、全国の学校ではどのように対応すべきか戸惑いが大きかった。東京学芸大学附属小学校は、文部省の学習指導要領編修の委員として参加している教員もいるので、その基準に沿って社会科・理科の単元作成から研究を開始し、次のように基本方針を決めた²。

- 学習指導要領によって示されている国の教科課程は、これを基準として尊重しなくてはならない。
- しかし、それは基準であって、基準そのものが、学校のカリキュラムとはなり得ない。
- 学校のカリキュラムは、子どもの実態、発達（シーケンス）、社会の機能や要求（スコープ）などを考慮して、具体的、適切なものでなくてはならない。
- したがって、学校のカリキュラムは、子どもの日常経験の教育的発展を意図した経験中心のカリキュラムでなくてはならない。
- 学校のカリキュラムは、教育的、意図的、計画的なものでなくてはならないし、その構成原理は、科学的な裏付けをもっていないとてはならない。

- 学校のカリキュラムは、子どもの経験を意図的、全面的に開発、発展させるものであるから、特定の教科を核(コア)として、他の教科をこれに従属させるようなかたよったカリキュラムであってはならない。
- 新しい学校カリキュラムは、子どもの日常経験の再構成という点に重点をおき、子どもの経験の質と量を刻明に分析し、それを総合したものを基礎として構成し、教科を含みながら、それを超えた立場で作成されなくてはならない。

学習指導要領を基準として尊重しつつ、児童生徒の実態と発達からシーケンスを、社会の果している機能及びニーズからスコープを構想して、経験中心のカリキュラムを作成するという。ただし、社会科を中心として他教科を補助的な位置に置くようなコア・カリキュラムは採らないで、教科を大切にしつつ、児童生徒の日常経験を再構成できるものにした、という基本方針である。当時、流行していたコア・カリキュラムのあり方に批判的であることに注目しておきたい。

同校はさっそく研究にとりかかり、その実験的成果を1949(昭和24)年12月には5冊にまとめた³。その中で学習と経験との関係について、「教育は児童たちが経験によって身につけたものに新たな事象における新たな経験によって新たな意味と機能とを与えてゆくことである。すなわち、教育は単なる経験ではなくて経験の絶えざる再構成なのである」。その意味で、「学校教育は児童によい経験をさせるだけでなくて実はよく学習させなければならない」と主張した⁴。これは、経験主義によるカリキュラム構想である。

最初に図表1「第〇学年教育課程年間計画表」からカリキュラム構成の概要を捉えておくと、児童生徒の「生活暦」を最上段に掲げて、その下段では、生活の諸課題を解決するための「単元」があり、また下段では、その内容を生活学習で展開する「経験学習」の欄が設定されている。そしてそれを支える「基礎学習」及び「健康教育」という位置づけである。「経験学習」は「学習活動」と「生活指導」の2つから成り、前者は社会科・理科等の課題を問題解決的に展開する学習であり、後者は生徒会や学級会などの自治的活動による学習である。「基礎学習」は、「言語」「数量形」「音楽」「造形」「図書館その他」などの系統学習から成り、いわゆる教科名では設置されていない⁵。これは「経験学習」をコアとし、「基礎学習」と「健康教育」とを周辺に配置するコア・カリキュラムである。

ただし、同校の五十嵐主事は、「カリキュラムといえばコア、コアと言えば生活単元の経験的学習と考えられ、カリキュラムの構成や問題は、ほとんど、コア・コースの単元設定と、その手続きに集中」しているのが当時の一般的動向で、これに対して「社会の要求」である「世論」は「学力の低下を嘆く声に充ちている」ことを問題視していた。同校としては、「教育の本質から考えて、成長は全人的でなければならない」、「カリキュラムの構成に当って」は、「生活学習の単元計画と基礎学習の能力表作成とを同じ重さで考えた」という。「かなり継続的な系統的練習を必要とする技能的なものを基礎学習」とし、「基礎学習を通して全人的成長発達を

図表1 第〇学年教育課程年間計画表

	月	生活暦	単元	経験学習	第〇学年教育課程年間計画表
	生活指導				
	言語	基礎学習			
	数量形				
	音楽				
	造形				
	図書館 その他				
	健康教育				

特に強調する」と説いていた⁶。一般的には、「全人的成長発達」を目指すかゆえにコア・コースのカリキュラムに集中するのが経験主義の特徴であるが、同校は、「基礎学習」を積極的に位置づける構想をしたのである。さらに、個人及びグループで問題解決学習を展開するために「図書館その他」も「基礎学習」のひとつに独立した項目で設定されている。「健康教育」が「基礎学習」に含まれないで、全く独自の領域設定となっていることも注目しておきたい。

第2章 教育目標の設定とコア・カリキュラムの編成

第1節 教育目標

それでは「教育目標はどのような原理に立ち、如何なる段階を経て設定」すべきか。「(1) 教育目的の根源は、社会の理想と課題でなければならない」。「(2) 教育目標はその性質として、常に各人によって達成されつつ更に次の活動を導く指標でなければならない」。「(3) 機能として見れば教育目標は、現実の学習活動を導く力を持ち、活動を評価する規範として働く。だから具体的で達成可能なものでなければならない」という。民主主義社会の理想と課題から演繹的に教育目的を抽出し、そこから具体的な活動を導く教育目標と評価基準までを一連のものとして設定しようという考え方である。そして①歴史的文化的課題と②国家及び産業社会の要請、そして③近隣地域社会のニーズを調査研究することで教育目標を設定したのである⁷。

この3領域の調査研究を経て、同校のカリキュラム管理委員会は、次のような理想的人間像を打ち立てた。「広く現代科学に理解を持ち、複雑な社会事態に対して聡明な洞察を下して、民主的に行動し、豊かな情操と高き良識とをもってよく人の説をきき主体的に判断して盲従することなく、平和を愛し他を理解し人を容れ、常に社会全体の発展と福祉を願い、健全な身体と熟練した技能とをもって喜んでこれに貢献しようとするような人間—これがわれわれの遥かにめざす理想的人間像である」と⁸。キーワードは、科学、社会への洞察、民主的行動、豊かな情操と良識、主体的判断、平和と福祉、健全な身体などで、当時の日本国憲法や教育基本法の理念と同質であると捉えられる。これをカリキュラム化するために、図表2「教育目標（理解）」について12項目、図表3「教育目標（態

図表2 教育目標（理解）

1	健 康	身体の保護保全及び健康を増進するために必要な基本的なこと（清潔、衛生、栄養、運動、睡眠、病気、整理等）がわかっている。
2	生活の合理化 民主化	主として家庭生活における食事、被服、手まわり用品、住居等の調整、手入、保存等の消費面を合理化し、家族各員の責務を自覚し相互親愛の上に民主的な楽しい家庭生活向上について清らかな理想を持っている。
3	社会的理解	人間相互の協力依存の関係を理解し、社会正義に鋭い感覚を持っている。
4	自治的精神	自分の生活をよく設計して合理的、能率的に、そして全体的にすすめると共に、社会全体の福祉と安寧を増進するための法律、秩序、民主的な政治機構に対して正しい理解を持っている。
5	仕事と生産	勤労の意味、仕事の社会的価値に対して正しい理解を持ち、職業及び生徒に関する知識を持っている。
6	交通通信運輸	文化の発展、生産の向上にもたらす交通、通信、物資の交流、分配をあずかる運輸の意味とその現状を理解し、その発展を考える。
7	新聞雑誌ラジオ	人間生活における意義と現状を理解し、その発達を考える。
8	教 育	教育の社会的機能、施設、進学及び学校社会の生活の正しいあり方がわかってくる。
9	数 理	日常生活や事象を数理的に理解し、合理的に処理する知識をもっている。
10	大自然の理法と 天 然 の 資 源	大自然の理法、四季の運行、生物、鉱物等の天然資源、それ等を支配している秩序に対して初歩的な理解をもっている。
11	文 学	童話、童謡等の児童文化に清らかな興味をもっていると共に詩歌、文章を理解することができる。
12	芸 術	絵画、音楽、劇、映画、自然の美しさ、服飾等について鑑賞し、基礎的な理解を持つ。

度)」9項目、図表4「教育目標(技能)」

8項目が設定された⁹。これらは上記の歴史的文化的課題と国家及び産業社会の要請、地域社会(学区)のニーズの調査、学習指導要領の分析、そして管理委員会での議論の末にまとめられたものである。「理解」・「態度」・「技能」の項目を見ると、かなり厄介な調査分析・議論を積み重ねたことが推測される。

図表2「教育目標(理解)」では、2. 生活の合理化民主化の項目で、「民主的なたのしい家庭生活向上についての清らかな理想を持っている」、3. 社会的理解の項目で、「人間相互の協力依存の関係を理解し、社会正義に鋭い感覚を持っている」、4. 自治の精神の項目で、「民主的な政治機構に対して正しい理解を持っている」など、民主主義への理解を目指す目標が設定された。そのほか1. 健康、5. 仕事と生産、6. 交通通信運輸、7. 新聞雑誌ラジオ、8. 教育、9. 数理、10. 大自然の理法と天然の資源、そして11. 文学と12. 芸術などの項目で、それぞれ科学的で合理的な認識の形成が目標とされた。図表3「教育目標(態度)」では、1. 科学的な態度で、「ものごとを突込んで研究しようとする探究心と、考え方、判断処理の仕方などが、分析的、総合的で計画性があり、科学的でわけもなく盲信したり雷同したりしない」

態度が求められ、そのほか2. 主体的な責任を持つ、3. 確信をもって熱心に、4. 人格の尊重、5. 協調、6. 礼儀、7. 公共の福祉、8. 審美的、9. 健康の習慣の態度など9項目が設定された。そ

図表3 教育目標(態度)

1	科学的な態度	ものごとを突込んで研究しようとする探究心と、考え方、判断処理の仕方などが、分析的、総合的で計画性があり、科学的でわけもなく盲信したり雷同したりしない。
2	主体的な責任を持つ	聞いたり、読んだりしたことや、見たことがらについては、よく批判し、検討して、納得する。常に自律的に自分の判断と確信とに従って行動し、その結果に対しては責任を持つこと。
3	確信をもって熱心に	ものごとの本末をわきまえ、本質的なことには、積極的に根気強く精魂を傾け、没頭邁進する。
4	人格の尊重	我執にこだわらず常に他人の見地も尊重し喜んで、良い示唆を受け容れ、いろんな考え方や方法を試みようとする、公明な態度、従って交友も偽らず、それぞれのよいところを認め尊重し親しむ。
5	協調	生を共にする人々について各人それぞれ個人差のあるところを考え、その正しい発展を喜び、力を協わせて共に働き共に楽しむ。
6	礼儀	身だしなみ、動作、心ばえがすっきりして濁りなく、気品があって、人につまらぬ不快感を与えないことはもちろん、進んで快い気持ちを抱かせるような応対をする。
7	公共の福祉	自分のものは勿論、特に公共のものは、書籍、器物、資料、資源などすべて大事にして、皆んなが利用し恩恵に浴することが出来るように努め、また約束や規約、法律、よいならわしなどを遵守し努めて他に迷惑をかけないように行動をする。更に進んで社会公共の福祉を増進するために積極的に貢献しようとする。
8	審美的	美を愛し、鑑賞することを喜び、これを求めようとする。
9	健康の習慣	健康を保持し増進するためのよい習慣を身につけている。

図表4 教育目標(技能)

1	言語技術	(1) 話す(自分の考えをはっきり正確に話すことができる。) (2) 書く、綴る(自分の考えを自由に正しく書き表わすことができる。) (3) 聴く(人の話を要点や主旨を正確にききとることができる。) (4) 読む(文字が読める内容を正しく把握評価することができる。)
2	数量的処理	(1) 計算(日常生活に必要な普通の計算ができる。) (2) 計量器の使用(日常生活に必要な普通の計量器を正しく使うことができる。) (3) 統計(事象を統計的に処理する能力がある。) (4) 図表(生活に必要な数量統計を図表に現わしたそれを理解することができる。)
3	道具の使用	文化生活に普通な用具や機械器具、施設などを巧みに使いこなすと共に、手入れや始末がきちんとできる。
4	家事の処理	(1) 被服(衣服の手入、保存、つくり及び簡単なものの仕立ができる。) (2) 食事(簡単な食事の支度、台所用品のよい使い方ができる。) (3) 清潔(清潔、整頓、清掃がきちんとできる。)
5	問題解決の技能	(1) 観察(事物を正確に観察する技能) (2) 洞察(事象の内容や意味を洞察する力) (3) 問題の把握(事象の内容や意味を洞察する力) (4) 計画の立案(問題を能率的に解決するための計画を合理的にたてることができる。) (5) 調査・整理・蒐集(資料を能率的に調査蒐集し、それを整理する技能) (6) 辞書や参考書の使用(目次、索引、カタログ手引などを巧みに使う)
6	事態反応力	(1) 事態の本質をみきわめる。 (2) 機敏にこれに対処する体制を整える。 (3) 頭や手足、体を自由にこなして事態に応じた行動ができる。 (4) 司会する能力、技術をもっている。
7	音楽	快く歌唱ができ、楽譜がわかる。簡単な楽器を奏することもでき、また一寸した作曲ができる。
8	美術製作	(1) 描写表現(絵に描いたり、図に現わしたりする技能) (2) 製作造形(有用な器物や美しいものを製作する) (3) 色彩感覚(色彩に関する感覚がはっきりしている。) (4) 形態感覚(ものの形態に関して正しい感覚がある。)

して図表4「教育目標(技能)」では、1. 言語技術は、話す：「自分の考えをはっきり正確に話すことができる」。書く・綴る：「自分の考えを自由に正しく書き表わすことができる」。聴く：「人の話の要点や主旨を正確にききとることができる」。読む：「文字が読め内容を正しく把握評価することができる」などのほか、2. 数量的処理、3. 道具の使用、4. 家事の処理、5. 問題解決の処理：①観察、②洞察、③問題の把握、④計画の立案、⑤調査・整理・蒐集、そのほか6. 事態反応力、7. 音楽、8. 美術製作でもそれぞれの技能が目標とされた。いずれの項目も、「教育目標は、現実の学習活動を導く力を持ち、活動を評価する規範として働く。だから具体的で達成可能なものでなければならない」というねらいである。民主主義を志向する同校の教育方針が教育目標(理解)(態度)(技能)によく表れている¹⁰。

第2節 コア・コースの単元計画

(1) スコープ

教育目標をもとに各学年に下ろしていくことになるが、具体的な単元計画を作成するためにはスコープとシーケンスを構想しなければいけない。同校は、NEA案、カリフォルニア案、サンタバーバラ郡案、ミシシッピー案、そしてバージニア・プランから学んだことを記している。経験主義教育では、「教育は経験の再構成」であるから、その経験の領域を確定しなければいけない。バージニア・プランのスコープは(1)生命財産・自然資源の保全、(2)物資や生産及びその分配、(3)物資の輸送及び人間の交通、(4)物資の消費、(5)娯楽、(6)美的欲求の表現、(7)宗教的欲求の表現、(8)教育、(9)自由の拡張、(10)個人の統合、(11)探検の11領域であり、他方、ミシシッピー案は9領域である¹¹。また、CIEのヘレナ・ヘッフアナン女史は同校の指導において、(1)自然界における人的物的資源の保護、(2)財貨の生産、(3)財貨の分配・消費、(4)財貨の運輸、(5)通信交通、(6)美的宗教的本能の表現、(7)教育施設、(8)娯楽施設、(9)行政的施設、(10)生命財産の保護保全、(11)自然的資源の保護保全、の11領域を提案している。そして学習指導要領は、(1)人格の発達、(2)生命の保護保全、(3)財産と資源の保護保全、(4)物の施設と生産の分配、(5)物と施設の生産と消費、(6)交通・通信・運輸、(7)交際、(8)厚生慰安、(9)統制の9領域構成で、この時の同校案は、(1)生命財産の保護保全、(2)自然的資源の保護保全、(3)物の生産、(4)物の分配消費、(5)物の運輸、(6)交通通信、(7)厚生慰安、(8)政治、(9)教育、(10)宗教的美的表現、(11)文化的遺産という11領域案であった¹²。この後、同校は上記の案を参考に検討を続けたのであろう、「どうしても、スコープが如何なる観点から如何なる方法によって選ばれるかの裏づけがなければ意味がないということを痛感した」。「地域社会の実態調査は調査範囲の問題、調査方法の問題、調査技術、整理方法、話し方などに錯雑した問題があって、教師達にとっては極めて貴重な体験であるが労力的にも時間的にも相当な負担」であったと報告している¹³。「社会生活の機能を郷土に即してどのようにとり上げるか」、「社会科学習の基盤」であるので、スコープの確定について、かなりの論議を重ねたことが推測される¹⁴。

同校はコア・コースを社会科だけでなく理科も含めて生活学習としてのスコープのあり方を研究し、最終的に次の10項目を確定した。(1) 生命財産と保護保全, (2) 自然資源の保護利用, (3) 物の生産, (4) 物の分配・消費, (5) 物の運輸, (6) 交通・通信, (7) 厚生・慰安, (8) 教育, (9) 美的宗教的表現, (10) 政治である。同校は、「何れにせよ、われわれ教育現場人としては、文献的研究と実態調査による分析とを、2つながら怠ってはならない。公教育は、本質的にいって、国社会の理想や地域社会の要求に立脚すべきであるし、教育行政の見地からいっても国の要求する枠(学習指導要領)、地域社会の持つカリキュラムに指導されるからである」とまとめている¹⁵。国の要求は学習指導要領の研究によって踏まえ、地域社会のニーズは実態調査によって分析することでスコープを確定したのである。

(2) シーケンス

次に図表5「シーケンス案」すなわち「児童の発達段階に伴う要求の発展系列」を確定して「学習内容の学年配当の規準」を作成した。図表の最下部にある項目は、認識・技能を独自の6領域(社会意識, 知的欲求, 情意的発達, 時間観念, 空間意識, 技能的発達)に分類し、これをもとに6学年にわたる発達を見込んだものである。例えば、「知的欲求」では、直覚的⇒実証的⇒分析的・総合的の順序に、空間意識では、家庭・学校⇒近隣⇒近郊⇒東京・日本⇒世界という順序の規準が設定された。シーケンスを設定するに当たって、教科カリキュラムのように、教科の論理的構造に従って容易なものから難しいものへというあり方が一般的であるが、他方、経験カリキュラムの場合は、「興味や能力の発達、時間観念や空間観念の発達に伴う生活領域或は意識圏の拡大に即して、拡大されて行く、身体的精神的な生活経験の領域における最も興味ある活動の中心を綴って学習経験内容が順序」づけられる。「学習活動は児童の理解力と態度と技能力とを基盤として営まれ、それは興味によって起動され推進されるものである限り、『興味を中心』を根拠とすべきは当然であって、それが論理的に発展と進行が保証されないならば、その活動は進められるべくもない筈である」と説明された。このように児童生徒の生活領域・意識圏の発達を基本原理として、理解力・態度・技能力の拡大に応じて掲載表のような学習経験のシーケンスが立てられたのであった¹⁶。

(3) 課題表と単元構成

スコープとシーケンスの枠組みができれば、「(1) 先ず、スコープ毎にそこで要求せられる諸能力があげられ、シーケンスに応じて

図表5 シーケンス案

高学年	6	行動化 社会観の分化・	分析的・総合的	美的情操・客観	歴史的観念へ	(自分)世界 日本	論理的 技術的
	5					日東 本京	
中学年	4	現実的 社会観へ	実証的	渡的段階 初歩的 分化・過	現代と 事物の 変	東京近郊	動的 形態的 や技術 的な活
	3					山手近郊 近隣	
低学年	2	未分化 的社会観	直覚的	(未分化) 童話的	未分化	近隣学校	活動的 色彩的 全身的
	1					学 校 家 庭	
学年	項目	社会意識	知的欲求	情意的発達	時間観念	空間意識	技能的発達

学年毎に順序づけられるべきである。(2) 同様に、スコープ毎に相当する生活課題があげられシーケンスに従って系列」づけられた。経験主義の理論では、児童生徒が直面している、かつ、生徒が興味をもって立ち向かうことのできる生活課題をとりあげることで、生徒の成長と発達につながる学習が可能となると捉えられている。上述の教育

目標(理解)(態度)(技能)の分析によって、獲得すべき能力が決定され、それを実現するためのスコープ10領域が定められたので、これに生活課題を配当したが、図表6「課題表」である。左端にスコープ、上端に学年を配置して、それぞれに生活課題を配置し、この生活課題を解決することで諸能力が児童生徒に育成されることが期待されている。同校によれば、この生活課題は「問題単位」として位置づけられ、これを一連のまとまりのある学習計画にしたものが「資料単位」であり、生活課題は「資料単位」を構成しているので「要素単位」とも呼ばれるという。その「資料単位」の一覧表が、図表7「単元一覧表」である。

ところで、ここに掲げた「課題表」と「単元一覧表」は、「生活学習」のための単元計画であって、カリキュラムのすべてではない。同

図表6 課題表

Scope \ 学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年
生命財産の保護保全	省略	省略	省略	省略	省略	省略
自然資源の保護利用	省略	省略	省略	省略	省略	省略
物の生産	○学校園、学級園にはどんなものが作られているか。 ○家では、どんなお手伝いをしたらよいか。	省略	省略	省略	○農業は、如何に改善されつつあるか。 ○工業の生産はどのようにになっているか。 ○農業、工業、その他いろいろな生産は、どのようなところに発達するか。(以下、省略)	○生産を増大するには、どのようにしたらよいか。 ○文化の進展には近代工業は、どのように影響を与えているか。(以下、省略)
物の分配・消費	省略	省略	省略	省略	省略	省略
物の運輸	省略	省略	省略	省略	省略	省略
交通・通信	省略	省略	省略	省略	省略	省略
厚生・慰安	省略	省略	省略	省略	省略	省略
教育	○学校では、どんな人から、お世話を受けているか。 ○いろいろのわからないことがあったときにはどうしたらよいか。	省略	省略	省略	○日本の教育機関はどんなに、なっているか。 ○郷土の教育施設をどう使ったらよいか。	○将来は、どのような学校に進学したらよいか。 ○教育施設を、うまく利用するには、どうするか。
美的・宗教的表現	省略	省略	省略	省略	省略	省略
政治	○学校にはどんなきまりがあるか。	省略	省略	省略	○学校の自治は、どうしたらうまく行くか。 ○日本の政治機関は、どのようになっているか。	○学校の自治はどのように進めていったらよいか。 ○外国の交際には、どのようになされるのか。

図表7 単元一覧表

学年/月	1年	2年	3年	4年	5年	6年
4	たのしい学校	2年生になって	私たちの学校	学校自治	よい家庭生活	貿易(凡そ6週)
5	じょうぶなからだ	私のうち	私たちの生活	大昔の生活		生活の合理化
6	おともだち	丈夫なからだ	夏の生活	たのしい生活	郷土の文化施設	(凡そ1週)
7	なつのおそび	たのしい夏				
9	秋の学校	たのしい秋	郷土の交通		日本の農業と生活	
10	秋の学校		秋の学校	武蔵野の秋	自然資源と生活	外国の生活と日本の生活(凡そ7週)
11	学校の近所	町の人	郷土の慰安	世田谷の発達	日本の工業	
12	わたくしのうち		冬の生活			
1		たのしい冬		ひらけゆく東京	日本の交通	のびゆく文化(凡そ6週)
2	たのしい学校学げい会		私達の町		日本の政治機関	
3	もうじき2年生	たのしい遊び		安全で便利な生活		

校は、「生活学習」の単元計画とともに、系統的な学習を必要とする「基礎学習」も重視していた。「『課題』とその課題を解決する『能力』とは表裏一体の関係にあるものであって、理想的に行けば、それ等の諸能力は総て生活学習のなかで生活経験として習得される筈のものである。表の上でも課題表と能力表は丁度重なるようになっている。けれどもわれわれの現状ではそれが完全にいかない。それで無理なく出来るものは、できるだけ生活学習において習得されるように計画するが、特に系統のやかましいものや、かなり継続的な系統的学習を必要とする技能的なものは、生活学習の外に基礎学習」としたという¹⁷。「基礎学習」を次に考察する。

第3節 基礎学習

「生活に必要な知識・技能が全部もれなく、しかも十分に、経験学習を通して学習し得るとは限らない。殊に数理に関する基礎的知識・技能のように系統を追って習得しなければならぬようなものを、経験学習に全部包含させることは到底不可能なことである。従って将来生活に必要な基礎的知識・技能は一般的に原理的に学習しておく必要がある」。その学習を確実に習得させるため「特別に基礎学習の時間を設けること」で対応しようという構想である。「経験学習が目的・内容的な学習にあるのに対して、基礎学習は方法的・用具的な学習で」、「両者は全く立場は異なる、しかもこの両者は車の両輪のように切離し得ない密接なる相互関係を持ちつつ進んでいくものである」という。「基礎学習」は、その「知識・技能の種類に従って類別されることが便利であろうから、在来の教科とほぼ同じ」で、「①言語に関する学習②数・量・形に関する学習③音楽に関する学習④造形に関する学習⑤図書館その他の基礎学習」に分類できるという。それから、「基礎学習は端的に言えば、練習を主とする学習活動」であるので、学習方法は「グループ形態をとるときは、その目的からみて、能力別グループ編成が望ましい」という¹⁸。

数量形の「基礎学習」について、「用具を用具たらしめて、日常生活における数量的な資料を基礎として常に正しい判断、正しい批判ができるよう、そして生活を創造してゆくことができるように、数量的な面における基礎を確立していくのが基礎学習」の役割である、と説明された。また、教科書については、「教科書を教えるという考え方は新しい教育の要求するところではない。教科書は参考として大いに活用すべきものである」とされ、言わば、「教科書を」ではなく「教科書で」という姿勢を示している²⁰。ただし、実際のカリキュラム作成に当っては、例えば、言語「基礎学習」の系統案の場合、「文部省の学習指導要領国語科編を参酌し」、「児童の言語の発達段階を考慮して作成」したとあり、基本的に「基礎学習」の内容は学習指導要領を基準に作成していたのである¹⁹。

「経験学習」と「基礎学習」の関係について、教育方法面で次のような5段階の進め方が提案されている。「経験学習」では、(A) 主題設定 (発意)、(B) 組織計画 (計画)、(C) 研究作業 (実行)、(D) 概括整理 (整理)、(E) 評価反省 (反省) の5段階であり、「基礎学習」では、数量形の場合、(a) 問題把握 (導入)、(b) 研究理解 (助言)、(c) 練習体得 (練習)、(d) 応用発表 (適用)、(e) 整理反省 (評価) という5段階で、「この段階中 (a) (b) (e) は、『経験学習』の (A) (C) (E) の

段階にあたる両者共通のものであって、(c) 練習の段階と (d) 適用の段階が基礎学習として特に加わり、経験学習の (B) 計画の段階は基礎学習において殆んど必要はないか、或は極めて軽く取扱われてよい」と説明された。これは要するに、算数の「基礎学習」として固有に指導しなければいけないのは (c) 練習と (d) 適用だけで、「基礎学習」(a) (b) (e) の段階は、「経験学習」の中でも対応することができるというのである。換言すれば、「経験学習」と「基礎学習」とが密接な関係にあり、「経験学習」と系統学習は矛盾なく進めることができるという説明である²¹。図表8「算数基礎学習案」(1年・5年・6年)を見ると、その学習内容は算数の基礎的知識の習得と練習、そして応用問題で占められている。同校の「基礎学習」における「練習」は徹底しており、(イ) 正しく理解した後に練習を始める、(ロ) 誤謬の進入を常に予防する、(ハ) 形式的な反覆のみでなく実生活に使用すること、(ニ) 先ず正確に、次に速さを、(ホ) 個人差に適応した練習をする、等々の項目が挙げられている。「基礎学習においては練習が最も主なる部分をしめ、その練習によって基礎的な知識を永久に自己のものとして身につけ、基礎的な技能を完全に体得し、自由自在にいついかなる場合にも適用出来るようにしておかなければならない」と要請されている²²。逆に言えば、この「基礎学習」の習得・練習が十分にできない学校では、「経験学習」をコアとするカリキュラムは成功しないということであろう。

このような仕方で、言語、数量形、音楽、造形、そして図書館利用の「基礎学習」計画が具体的に立てられ訓練され、それらが生活的な「経験学習」を支えるのである。また、図書館利用が「基礎学習」の重要なひとつであることは、児童生徒の問題解決の学習活動を展開する上で不可欠な位置を占めるからである。図書館教育のスコープとして、図書愛護、本のこしらえ、図書の選択、辞書、百科事典、図書館、図書の分類、カード目録、本の読み方、特殊参考書、本の歴史、本の製作と配給の12領域が設定され、その領域・学年ごとに単元が設定されている。例えば、図書愛護では、小学校3年「文集をつくろう」、第4年「本の作り方をしらべよう」、第5年「本の歴史をしらべよう」、そして第6

年「図書館の仕事を手伝おう」の単元が設定されている。このような指導を通じて、図書館の利用の仕方や資料の収集の「基礎学習」がなされる²³。それらが調査研究の方法を習得する上で大事なスキルとして設定されて

図表8 算数基礎学習案

		1年	2年	3年	4年	5年	6年
第1学期	4月	唱え方・数え方(1~5) 一つ二つ1. 2. 3. 4. 5 順序数を数える(1~5) 数字を読むこと、書くこと(1~5)	省略	省略	省略	一億未満の数を書いたり読んだりする 問題解決	収支勘定(含繰越金)
	5月	唱え方・数え方(1~10) 一つ二つ4・5……9.10 書き方(9まで) 数の増減	省略	省略	省略	目測によって長さや距離をはかる。正方形・長方形の面積を計算する。 $1a = 100m^2$ $1ha = 100a$ 平行、垂直、鉛直線	領収書 預金申込書 勘定書 貯金 問題解決(乗除2段階)
	6月	比較 大小、多少、長短、上下 時計の見方—何時 名数 本、匹、羽、枚、人、台	省略	省略	省略	時間の単位 $1分 = 60秒$ $1/100位$ の小数の加減まで そろばん加法 収支勘定	地図上でまがった道のりをはかる 複雑な円形の面積を方眼の数によってはかる(端下は5) 珠算減法
	7月	唱え方 20まで 読み方 20まで かたまり 四角・ま四角・長四角	省略	省略	省略	問題解決 (乗・除1・2段階)	乗数3位数以上の乗法 積の位取りを、概算によって定める 相似形

いることは注目に値する。主体的な課題追究・問題解決学習を基本としているカリキュラムであるが故に、その解決の方法・情報収集のスキルを系統的に教えることが重視されていたのである。

なお、「健康教育」は、「経験学習」と「基礎学習」と並んで3領域でカリキュラムを構成するなど独自の位置が与えられているが、なぜ「基礎学習」に入らないのか、その理由は明示されていない。報告書には、「健康教育で期待される衛生法・体育、そしてその他の健康教育の内容で、6年のカリキュラムはできるだけそれを単元学習と結びつけてゆく努力をした」。「他面、生活指導と一体となって、健康生活の条件にかなう良習慣の形成に努力」もした、とある。さらに、健康教育として夏期臨界学校を展開したことが報告されている²⁴。健康教育のカリキュラムは、「経験学習」とは調和しがたい独自の訓練系統と運動会などの展開が必要であるという事情よるものと推定されるが、東京高等師範学校附属小学校でも同様に独立した位置づけであった²⁵。

第4節 自治活動

同校の自治活動は、「学校内外の生活を正しく理解し、理想的学校社会の建設を期し、社会的な良識と性格を伸ばして、品の高い社会人となる」ことを目的としている。「理想的学校社会」とはジョン・デューイの影響が色濃く出た独特の表現であるが、「毎日、学校社会の建設のために、学校社会という共同生活社会全体のために貢献することを修練し、社会的良識と性格、すなわち民主的な常識と態度とを長養しようとすることを形式的目的としているのである。かくて毎日、学校社会への奉仕・貢献の努力は、やがて気品ある日本人たらんことをめざしているのである」と説明された。その具体的項目は、「1. 人格を尊重し、よく協力する精神を培う。2. 自由を尊び、且つ責任感の強い性格をつくる。3. 公德心を昂揚する。4. よい指導のもとに自律・自治の精神を伸長する。5. 進取の気象を富まし、自発的な奉仕者としての精神を養う。6. 正義にもとづく正しい批判力を養う。7. 社会的事象についての正しい理解力を養う。8. 正しい言語・態度をつくる。9. 余暇を活用し、事に対し常に能率的な労作をする。10. 心身共に健康で明朗な性格を培う。」という10項目で、民主主義社会の市民育成に通じる項目である。説明では、「きそくをつくる機関の一員であると同時に、きそくを施行する機関の一員であることの自覚をもつこと」、「やがて民主的社会の自治組織に活躍するのに適切な組織とすることが大切」であること、そのために「自治活動における指導者（リーダー）と一般児童との関係をはじめ、討議法・多数決制等」について理解することが求められている。自治活動は、学級代表、生活委員、整備委員、厚生委員、学芸委員、図書委員、経理委員、科学室委員、創作室委員、放送委員、郷土室委員などによって、(1) 全校児童総会、(2) 委員総会、(3) 代表委員会、(4) 各委員会、(5) 学級自治会などが組織され、「自治活動の指導系統」が予定されていた。

縦に並んでいる指導項目は、自治性、礼法、ことば、交通訓練、集合訓練、遊びの指導、施設のかい方、もののかい方、食事訓練、放送聴取、環境衛生、環境美化そして避難訓練の13項目で、6学年にわたって詳細な指導計画が立てられた。自治性では、1年で「自治の精神、遊びのき

まりをつくりまもる」, 2年「同上, 自分たちでできることへの関心」, 3年「学級自治のしつけ, 清整, 日直」, 4年「同上, 学校自治への関心と協力」, 5年「学校自治への貢献」そして6年「学校自治の指導」というように「自治活動における指導者」ひいては民主主義社会を担う市民の育成が狙いとされた。そのほか, 「食事訓練」では「手を洗う, えしゃくしてたべる, よくかむ, たべおわってえしゃくする」など訓育的なことも施されており, これらの項目がきちんと遂行されるならば, 学級経営及び学校全体の生徒指導において, 秩序ある活動が展開されたものと推測できる。

しかし, 同校の「自治活動」は学校側の統制指導性が強いように感じられる。委員会活動あるいは図表9「自治活動の指導系統表」には, 児童生徒の自発性・

主体性を促す具体的手立てが見えない。説明としては, 「自治活動とは, 児童の自治的生活を意味するもので, 児童自らが自分たちの学校を, 自分たちの学級を, また児童自身を, 理想形態にまで仕上げようとする活動をいうのである」と断言するが, 次いで, 「したがって, 指導者側よりみれば, 生活指導である。自治活動とは生活指導とは表裏一体をなすものであり, 両者一体となってはじめてよい結果をおさめることができる」。「児童活動は指導の裏づけともいべき指導者の助成があって全きを得るものである。学ぶ者はどこまでも児童」だからであるという論理には, 奈良女子高等師範学校附属小学校の「なかよし」に比して, 児童生徒への信頼が弱い。東京学芸大学附属小学校の場合は, 教師の指導性が強く, かつ個人よりも全体性が重視されている。「自治活動は個人の活動がもとより大事であるが, 学校社会の建設という立場から, 個人よりは全体の活動が大切なのである。全体の中の個人としての活動が大事なのである。全体によって習慣形成された文化形式が大切なのである」と, 全体性が強く力説されていた²⁶。

第3章 カリキュラム構成と評価

第1節 カリキュラム構成

さて, 同校のカリキュラムはどのように編成されたのであろうか。図表10は, 「第6学年の年

図表9 自治活動の指導系統表

学年	1年	5年	6年
自治性	自律の精神, 遊びのきまりをつくりまもる	学校自治への貢献	学校自治の指導
礼法	みなりをきちんとする, 先生・お客へのあいさつ, 国旗を大切に	同上	同上, ものをうける礼法
ことば	正しいことば	同上, 発表力をつける	同上
交通訓練	交通のしかた, 道草, 乗物の安全のりかた	同上	同上
集合訓練	時刻におくれない口をむすぶ	同上, 集合進行の関心	同上, 進行ができる
遊びの指導	安全なあそび, いぢわるしない, 内遊・外遊を守る	同上, 下級生を導き仲よく	同上
施設のつかい方	便所の使い方, ロッカーのかぎをしめる, 水道の栓をしめる	同上	同上
もののつかい方	校具をていねいに, もちものに記名する	ものの修理	同上
食事訓練	手を洗う, えしゃくしてたべる, よくかむ, たべおわってえしゃくする	同上	同上
放送聴取	だまってきく	同上	同上
環境衛生	上ぐつ・下ぐつのくべつ, わたりいたのつかいかた, 手拭・ハンカチ・紙をもつ	同上, ほこりのしらべ	同上, こきゅうとほこり
環境美化	かみくずをちらさない, らくがきをしない	同上, 美化のくふうや花をかざる	同上, 物のおき方のくふう
避難訓練	火の用心, おちつき, 人をおさない	同上, 指導性をもつ	同上, 自治的な指導の立場に立つ

次計画」である。いわゆる教科主義のカリキュラムではないので、国語・算数・理科・社会・音楽・図工・体育・自由研究などの教科名では構成されておらず、見るからに生活経験主義で4月から翌年3月までの12ヶ月に渡る計画となっている。掲載したのは、4月と5月分だけで省略するが、1年にわたって始業式に始まる生活歴が列記され、9月には自由研究発表会が見られる。日々の自由研究と夏休中の自由研究などをふまえた発表会であろう。その下に「単元」が設定されて第6学年では、「貿易」、「生活の合理化」、「外国の生活と日本の生活」、そして「のびゆく文化」という4単元で、その単元を構成する学習活動が下の枠に記されている。○よりよい生活の建設、○貿易のわけとその重要性、○日本の貿易のうつりかわり、○貿易のための施設と手続き、○輸出産業の現状、○輸出品と相手国、○輸入品と相手国、そして

図表 10 第6学年の年次計画

五		四			月			
○こともの日 ○立夏(7) ○母の日(8) ○体力測定(9) ○童話会(11)	○こともの日 ○憲法記念日(3) ○八十八夜(2) ○メイデー(1)	○天皇誕生日(29)	○天童誕生(27)	○大掃除 ○始業式(11) ○自治委員任命式 ○自治委員任命式(14) ○復活祭(17) ○通信記念日(20) ○体格測定(21) ○結核予防週間 ○定期身体検査	生活歴			
易		貿			單元			
○輸出品と相手国 ○輸入原料及び国内原料による輸出品		○よりよい生活の建設 ○1六年生の自覚とつとめ ○2休みの中の生活報告と今後の学習 ○貿易のわけとその重要性 ○1外国からきたもの、しらべ ○2日本の経済生活と貿易 ○3貿易博覧会の見学 ○日本の貿易のうつりかわり ○1貿易のうつりかわり ○2日本の貿易の発達 ○3戦前と戦後の貿易 ○貿易のための施設と手続き ○1貿易に従事する人々 ○2為替レート・輸出入回轉資金 ○3主な貿易港と航路 ○輸出産業の現状 ○輸出産業の重要性とその種類 ○1生産状況とこれからのみとおし			○生活指導 ○自治的態度 ○会合の進行 ○用具の管理 ○教室の整備 ○交通道德 ○品よい乗車 ○公共施設のよい使用法 ○給食のせわ ○教室の換気 ○国旗の礼法 ○集会の礼法 ○下級生のせわをよくする			経験学習
よい発表 英会話		よい発表 英会話 英会話 論文の構想 新聞をよむ 英会話 よびかけの理解 夜明け			言語			
分度器で角を計る 円グラフに表れた角度から割合をしらべる		分数を整数でわる 分数の加法 減法			数量形			
あかつき 鑑賞 ランテ 器楽 五月の歌		二部合唱 されいな発声 おぼろ月夜 二部合唱 読劇及び視唱			音楽			
接合法 つくり方 箱		木材の性質 と木製品のオッチが使える スケッチ 扫除用具の修理 描写 遠景・中景 近景を入れ			造形			
出発合図用 具がつかえる		熟 カード目録 の使用法習 特殊参考書の使い方 掃除用具の修理 描写 遠景・中景 近景を入れ			図書館 その他			
○前轉・逆 ○体格・体力測定		○姿勢 ○身体の清潔 ○換気・処理 ○塵埃・処理 ○体格測定 ○徒手体操 ○徒手体操 ○種登り ○とびこし ○球なげ ○野球・フットボール ○リズム運動			健康教育			

○これからの貿易と心得、という項目が配置されている。内容はいかにも社会科的であるが、後掲図表12「カリキュラムの時間の割合表」(15頁)を見ると、「お仕事(経験学習)」が全体の40%を占め、その内訳は社会科的15%、家庭科的4%、理科的9%、国語科的6%、算数科的3%、音楽科的2%、図工科的2%という時間割合である。また「経験学習」の中には「生活指導」の枠もあり、自治的態度・会合の進行・用具の管理・教室の整備・交通道德・品よい乗車、公共施設のよい使用法、給食のせわ、教室の換気、国旗の礼法、集会の礼法、下級生のせわをよくする、進んで奉仕、よい発表などの項目が見られる。

「経験学習」と並行して「基礎学習」と「健康教育」が位置づいている。「基礎学習」の「言語」では、「批判してきく、司会の話法、私情の理解、静かな午前、英会話、論文の構想、新聞を読む、

呼びかけの理解」などの項目が見られる。英会話は言語指導の一貫で年度を通して念入りに設定されている。学習指導要領の枠を超えて同校独自の英会話が第6学年で指導されていたことになる。「数量形」は、計算練習、分数に整数をかける・割る、分数の加法・減法、分度器で角を測る、円グラフ、帯グラフ、比例計算などが内容である。「音楽」は、三部合唱—さくらがり、鑑賞—椿姫前奏曲、器楽—さくらさくら、二部合唱—仰げば尊し・よろこびの歌などが見られる。「造形」は、遠景・中景・近景を入れた風景描写、掃除用具の修理、スケッチ、木材の性質と木製品の作り方、針金・板金製の模型の製法、やさしい電動機、工作機械の手入れ法など、図画・美術というよりも手工業を支える技能教育が内容である。「図書館その他」は、図書館の利用方法と図書の修理などが内容で、それは前述のように「経験学習」を児童生徒が自由研究をはじめとして自主的研究に進める上で不可欠なものである。「健康教育」は、○姿勢、○体格測定、○徒手体操、○棒登り、○球なげ、○住居の衛生的条件、○リレー、○皮膚の摩擦、○幅跳び、○看護法、○バレーボール、○水泳、○傷害と予防など衛生とスポーツなどが内容である²⁷。

上記のカリキュラムがどのような週間計画で進められていたのか、図表11「第6学年の週間計画」(6年1組第13週の週間計画7月4日～7月9日)の時間表を見ると、7月4日の月曜日は、生活委員会の自治活動から始まり、続いて「朝礼」と「計画」の時間で、「朝のあいさつ、昨日の反省から今日の学習の計画の確認。今日の学習の注意」などがなされる。7月7日の木曜日を見ると、9時10分からは「生活の合理化」という単元で、「生活の合理化の体験を父親に聞き、問題のつけ方・進め方を研究する」ことが狙いである。学習活動としては、「家庭における合理化の調査の概要を発表し、特に深い体験をもた

図表 11 第6学年の週間計画

れている河尻氏にお話を聞き、その「実験その他の助手に河尻君と福島君」が担当し、質疑応答では、参観中の母親も参加するなどして、上記の狙いを確実にすることが予定されている。10時半から10分の集会では、指導教官から「七夕」につ

曜日	7・4(月)	7・5(火)	7・6(水)	7・7(木)	7・8(金)	7・9(土)
9.00	生活委員会		代表委員会		各部委員会	家庭 学 習 — 自 由 研 究
	朝礼	計画	計画	計画	計画	
	計画	英語 (ボートの歌)		生活の合理化	生活の合理化	
10.00	生活の合理化	生活の合理化	水泳			
10.20	休	休		休	休	
	集会 水泳の注意		休	集会・七夕の話	集会・生活委員 から	
10.40	ラジオ 「学問の歴史」	ラジオ 私達の科学	英語 (おもしろい詩)	図書の修理 (図書館)	生活の合理化	
11.00	生活の合理化	生活の合理化				
	(國語) 茶わんの湯	水泳	生活の合理化	(算数) いろいろの問題	水泳	
12.00	書食・校内放送	書食・校内放送	書食・校内放送	書食・校内放送	書食・校内放送	
1.00	休	休	休	休	休	
	(音楽) いずみのほとり	自由 研 究	(算数) いろいろの問題	(國語) 茶わんの湯	(國語) 茶わんの湯	
	休		休	休	休	
2.00	(図工) 間取図の見方 かき方		教室備品の 修繕	水泳	反省と計画	
3.00	計算練習	計算練習				
	掃除 反省	掃除 反省	掃除 反省	掃除 反省	掃除 対抗野球	

いての話を聞く。「学級としてもこれからの児童の関心を空にむけたい」ということであつた。続く10時40分からは「図書の整理」(図書館)で、「図書の修理を通して図書の構造や社会奉仕の精神・態度を学ぶ」ことが狙いである。11時20分から12時までは、算数「いろいろの問題」である。「乗除法の組み合わせによる2段階の応用問題を解決させる」ために、「基本的な計算練習」をさせるという仕方である。午後は、1時から国語で、次は水泳の時間、そして掃除の後反省会という1日である。木曜日の時程を見ると、従来型の教科教育の時間が少なく、「経験学習」及び「健康教育」の時間が目立っている²⁸。

1週間を見ると、「自由研究」の時間が火曜日午後1時から2時半までと土曜日午前が「家庭学習—自由研究」となっている。実質、週休2日制で土曜日は家庭での「自由研究」時間である。「自由研究の時間は、学校における自由研究と家庭における自由研究とに分け、火曜の午後の学習時間は4年以上の児童の為の学校における自由時間とし、土曜は全学年家庭における自由研究の時間とし、児童は学校に登校しないで各家庭或は校外施設等において自由に研究するようにしている。即ち1週5日制の形をとっている」と報告されている。9月には自由研究発表会が設定されているので、おそらく理想としては、毎週の自由研究と夏休みの自由研究とをつないで、その成果を発表することが期待されていたのであろう²⁹。カリキュラム上の位置づけは明示されていないが、個人的な研究を中心に問題解決志向の「生活学習」に含められていたものと思われる。

なお、自由研究の内容であるが、同校の報告書にはその詳細を確認することは出来なかつた。当時、どのような仕方とどんなテーマを研究していたのであろうか。参考に、愛知県幡豆郡西尾町立八ツ面小学校の2つの指導例を挙げておく。ひとつは6年生全体で「日誌を作ろうと言う要求」から、出版・印刷工場への見学と印刷の歴史を単元学習によって進め、それを発展させることで自由研究へと至った事例である。「インクのローラーが走って石版に版をおこした所にインクがついて、他の所にインクがつかないのはなぜだろうか」という疑問が生じ、「これを究めようとする意欲、この意欲(問題)の満足(解決)は児童が自主的にもつ自由研究によるの外ない」、「教師の指導は特定の自由研究時間にはなく個々の児童の学習の進行過程に則してなされる。研究は課外に学校や家庭や実地見学等々多面的におこなわれると共に学習のうちにも進められる」という進行報告である。もうひとつは、霜柱の研究をした5年生の村松よねの事例である。「4年生の3学期に校舎裏の畑の土がぼかぼかしていることに問題をとらえ、どのようにして霜柱はできるか毎日たのしんで観察していた。当時わが校は学級自由研究(必要な時に必要な教師に相談できるようになっていた)時間を特設していたが、この時間はもとより、毎日教師に報告し質問し指導をうけていた」。さらに彼女は、「夏から秋にかけて本を中心に研究をつづけてきた」という。教師としては、「このような自由研究がどうして特設時間内に進められよう。も早児童は自らの自由研究の開拓に進んでいる」という。以上2つの例は、「わが校の目ざす自由研究の一端が現れていると思う。与えられた時間によってなされる自由研究から自己の意志に支えられる自由研究、しかもいつどんな所にも問題の逢着した時に指導がなされる自由研究、これこそ真の自由研究である」と愛知県八ツ面

小学校は報告している³⁰。

推測になるが、おそらく東京学芸大学附属小学校でも同様の展開がなされたものと思われる。

東京学芸大学附属小学校に戻って、年間の授業時間数を詳細に集計した図表12「カリキュラムの時間の割合表」を見ると、「経験学習」の「お仕事」は低学年65%、中学年50%、そして高学年40%である。「経験学習」

図表12 カリキュラムの時間の割合表

内容	学年	低学年			中学年			高学年		
		1	2	計	3	4	計	5	6	計
お仕事 (経験学習)	社会科的	18%	18%	65%	18%	17%	50%	15%	15%	40%
	家庭科的	0	0		0	0		4	4	
	理科的	9	8		8	10		9	9	
	国語科的	13	13		12	10		6	6	
	算数科的	9	8		8	4		3	3	
	音楽科的	9	8		4	3		2	2	
	図工科的	9	8		8	3		2	2	
(基礎学習) お稽古	言語	9	13	22%	13	13	30%	12	12	40%
	数量形	6	8		8	10		10	10	
	音楽	0	0		3	3		4	4	
	図工	4	4		4	4		4	4	
	家庭	0	0		0	0		5	5	
(健康・ 運動 体育)	体 育	14	13	13%	12	10	11%	9	9	9%
研究	自由研究	0	0	0%	0	10	9%	12	12	11%
	自治会	0	0		2	3		3	3	
行事		100	100		100	100		100	100	

は全科・総合学習的な授業なので、低学年はその割合が高く、高学年になるにしたがって系統的な教科学習の時間が増えるので、「基礎学習」の「お稽古」を見ると、低学年22%、中学年30%、そして高学年が40%である。その内訳を見ると、「基礎学習」では、やはり「言語」と「数量形」の時間が圧倒的で、2年生で21%（13+8）であり、6年生では22%（12+10）である。「経験学習」になると、社会科的内容が中心でいずれの学年も15～18%を占めるなど、戦後改革の社会科の位置づけを反映した割合になっている。「経験学習」では、前述の課題表をふまえて単元が構成されていることは前述のとおりであるが、その時間の内訳は、この表の通りで、1年生なら、社会科的内容が18%、家庭科的0%、理科的9%、国語科的13%、算数科的9%、音楽科的9%、図工科的9%と割合であり、6年生なら、同様に15%、4%、9%、6%、3%、2%、2%という割合である。「経験学習」では生活的課題を対象として全科的総合的に学習を進めることが予定されていたのである。「経験学習」と「基礎学習」のほか「運動（健康・体育）」が独自に設定され、低学年13%、中学年11%、そして高学年9%でほぼ毎日1時間が当てられている。「研究」という枠組で「自由研究」と「自治会」とがあり、中学年9%、高学年11%の時間が割かれている。「自由研究」も生徒の自治的活動も、いずれも生徒自身の自主的な研究によるものと捉えて、「研究」という枠組にしたのであろう。「お仕事」と「お稽古」と「運動」に続いて、「研究」としているところに同校の意気込みが感じられる³¹。ただし、自治活動を「研究」に入れてしまうことで、活動幅が限定されることはなかったのか気になるところである。

第2節 カリキュラム評価

さらに、カリキュラム評価に相当する試みがなされていたことに注目したい。例えば、図表13

「カリキュラム評価」のように、貿易の单元について、「理解」15項目、「技能」10項目、そして「態度」10項目によって評価項目が立てられ、「学習前」と「学習の結果」を比較している。「貿易の重要性」「貿易の歴史性」「輸出産業の現状」等の理解は、学習前は低かったが、学習の結果は高まっているという評価である。「技能」の側面では、「要点をとらえてきく」「意見をまとめて発表する」「きれいにまとめてノートする」、

図表13 カリキュラム評価

項	学習活動として			学習の結果			学習前の状況		
	+	0	-	+	0	-	+	0	-
理 解	1. 貿易の重要性		○		○				○
	2. 貿易の歴史性			○		○			○
	3. 輸出産業の現状			○		○			○
	(省略)								
	13. 貿易振興の方法			○		○			○
技 能	14. 貿易関係者やわれわれの心得			○		○			○
	15. 国際生活への関心		○		○				○
	1. 要点をとらえてきく			○		○			○
	2. 意見をまとめて発表する			○		○			○
	3. きれいにまとめてノートする			○		○			○
態 度	(省略)								
	8. 参考書を巧みに使用する			○		○			○
	9. 資料をあつめて整理する		○			○			○
	10. 構成力			○		○			○
	1. 他人の言動に対する寛容さ			○		○			○
態 度	2. 他人の権利を尊重する			○		○			○
	3. 他人に迷惑をかけない		○			○			○
	(省略)								
	8. 社会事象に興味をもつ		○			○			○
	9. 物を尊重し使用する			○		○			○
10. 礼儀作法 (品のある態度)			○		○			○	

「他人の言動に対する寛容さ」「他人の権利を尊重する」「他人に迷惑をかけない」などの項目で比較している³²。この比較をどのような方法でしたのか説明はないが、教員の側の観測による判断と推測される。実際の授業での「学習活動としての」の評価と、テストなどによる習得結果の評価など総合して教員が専門的に判断したものであろう。

最後に、同校のカリキュラム改革の意図について、再度確認しておこう。「われわれは、生活経験に基づく学習を提唱したが、それは、当時、かなり広く行われていた、特定の教科を中心とするコア学習でもなく、「また、川口プランや、福沢プランのように、とくに地域社会の改善をめざして、地域社会の課題解決を学習とみなす立場でもなかったのである。精選された、ごくあたりまえの日常生活における経験を学習することによって、生活の技能や態度を獲得させることを願ったのである。急進的な教育思潮や、理想にはしった課題解決方式をとらず、あくまで、現実に根差した手堅い方式をとり、基礎学力の充実をも考慮したのである」と³³。

要するに、社会科をコアとし他の教科を従属させるコア・カリキュラムは採らず、また、地域社会の課題を解決するラディカルな教育プランの方式も採らないで、学習指導要領が求める基礎学力形成を前提として、経験主義のコアを入れたカリキュラムを作製したのである。そして、カリキュラム評価では「基礎学習」を重視し、その基礎学力形成の成果を「理解」「技能」「態度」の観点から確認したのである。

以上、東京学芸大学附属小学校の戦後草創期のカリキュラム実験について検討してきた。1947(昭和22)年に学習指導要領が出されて間もない1949(昭和24)年12月の時点であるにもかかわらず、かなり完成度の高いカリキュラム実験を展開し、その成果を全5冊にわたって刊行したので

ある。その成果は同校の教育界における位置からして全国の学校に影響を与えたことは容易に推察できる。まさに1947年学習指導要領のモデル・カリキュラムである。

第4章 第2期実験学校のカリキュラム改革

次いで第2期の研究開発である。同校は、1951（昭和26）年の学習指導要領改訂後、1952（昭和27）年より3年間、文部省実験学校として、「全体計画をどのように立てるのが、子どもの学習に有効か」という課題を研究するように要請された。「この研究は、教育課程の構成に関する問題であって実験研究としては、きわめて困難な問題」（文部省初等・特殊教育課長上野芳太郎）であった³⁴。1951年学習指導要領改訂では、教科等を4領域に分けて%だけの時間配分にしてそのカリキュラムのあり方については規定しなかったように、文部省としてはカリキュラムの方針がまだ確定できない段階にあったので、これを早急に解決すべく実験学校にその研究を委嘱したのであった。同校は、従来の研究経緯から重い任務を期待されたものと推測される。文部省の問題意識は次のようであったことが知られる。戦前は、「すべて国定という名のもとに、規格化され、統制された方向のものであったのに対して、戦後は、教育の大きな方針は法律によって国家的な意思として決定されても、その具体的な点は、あげて現場の創意と自主的な決定とにゆだねられた。この結果各地において、それぞれの地域の特性や児童の実態に即して、多くの全体計画、もしくはこれに類するものが発表され論議された」。ところが、「このような発表や論議のはなばなしい展開が、一種の流行病のように全国に広がって数年たつうちに」、「学力低下の問題をはじめとして、道徳教育、学習能率の問題、教科以外の活動の問題、社会科の再編成問題など、いくつかの問題に向って、鋭い批判が加えられるようになった」というのである。要するに、これらの問題を解決するために、新しいカリキュラム構成を開発することが同校の研究課題となったのである³⁵。

第1節 研究第1年度（昭和27年度）の研究

まず第1年度（昭和27年）の研究であるが、同校は改めて課題の「有効な学習」及び「全体計画」とは何かについて再吟味した。その結果、『「有効な学習」とは、学習経験が統合的に獲得され、実践的な知性として働くということであり、『全体計画』というのは、そのような子どもに育成するための、『学校生活の組織と編成の凡てである』』と仮説的結論を出した。ここには「学習経験」、「統合的な獲得」、「実践的な知性」そして「学校生活」というように、学習を経験として捉え、かつ生活経験も含めて経験を統合し、実践的に使える知性の獲得はいかにして可能か、そのためのカリキュラムはいかにあるべきかという問題意識がみられ、経験主義教育についてより鋭角的な追究へと進んだことがわかる。

同校は、これまで経験重視のコア・カリキュラム（経験型）の開発を中心に、教科重視のカリキュラム（教科型）、そして両者の「複合型」のカリキュラムについて実験的研究を重ねてきた経緯がある。各学年3学級あるので、1組・2組・3組を縦に6学年まで分けて、3つの型の教育を実験し

てきたが、ここでも1部(経験型)、2部(教科型)、3部(複合型)に分けて継続した。経験主義のコア・カリキュラムは魅力的であるが、教科型も捨てがたい長所があるので、その両者を生かすことも考えられたが、それだけでは学校のねらいを十分に果たすことが困難であるという認識に至り、同校は、文部省の指定を受けたところで、本格的に目指すべき教育を見直し、次のような「期待される子どもの人間像」を確認した。①環境に対して、いつも積極的に働きかけ、自分で問題を見つけようとし、また見つける子ども、②正しい判断ができる子ども、③行動的な子ども、④健康な子ども、⑤問題の解決に役立つ様々な能力、技能、態度、知識が心身の発達に即して、統合的に獲得されている子ども、⑥個性がはっきりしている子ども、⑦行動が社会的効果性をもった子ども、という7点である。時代は経験主義であり、子ども生活を中核として「子どもの経験統合」をいかに有効にするか、という点に問題意識があったので、上記7点を決定したのである。

同校の最も重要なキーワードは「統合」で、「子どもの環境に対しての興味や欲求を核心とし、習慣や既有経験、身体条件等を基盤とし、安定感、情緒性、社会性、知識、技能などが統合されて、有機的に存在すること」を確認しようとした。そのためにひとつは「心理的側面からの実験」で、「統合的に発達した子どもの性格を分析し」、「性格の統合の度合を診断」したこと、もうひとつは「学習指導の実践による実験」で、「問題解決の活動を中心とした学習の実践」を通して3種のカリキュラムを比較検討したことである。問題解決の活動を実験研究の対象にした理由は、「こどもの経験統合に密接な連関があり、子どもが、どのように経験を深化し、拡充するかの実態を解明するのに適切である」と判断したからであり、第2年度の「全体計画」のカリキュラムでは、「経験統合の立場から合理的に位置づける根拠を探究する方法を発見」したいと考えたからである³⁶。

第2節 研究第2年度(昭和28年度)の研究

第2年度は、「問題解決の学習を、全体計画の中に正当に位置づけること」で、「どのような型の問題を、どのような過程で解決」し、これをどう評価するか、ということについて、同校は3種のカリキュラムを比較研究し、次のような結論を得たという。第1に、問題解決は、「なんらかの形で、環境に『反発』し、または、『働きかける』ことによって、成立する」、その解決の型は、「理解型」と「実践型」とに大別できる。第2に、低学年は「実践型」が多く、高学年に進むにつれて「理解型」に移行する傾向がある。第3に、「生きた問題をとらえ」、その問題解決の学習をするには「経験型カリキュラム」が適切である。第4に、教科カリキュラムでも、「理科・社会科等においては問題解決の活動」を児童が興味をもって進めることができる。第5に、問題解決学習は「統合的、集中的に行うことが望ましい」ので、「この点、教科並列の教科型カリキュラムには問題点が存する」。第6に、理解型か実践型か問題の型によって、「学習活動の形態は異なった傾向性」がある、これが「片寄ってしまうことは望ましくない」。第7に、「反面、問題の型による学習活動の片寄りを生かして」、「学習経験の配列と組織を考慮」するなど、カリキュラムの全体計画を立てる必要がある、という7点である³⁷。

第2年度は、学習経験を統合する問題解決学習をカリキュラムにどのように位置づけて、どのように学習過程を組織したらよいか、そしてその評価について実験研究したのであったが、学習には「理解型」と「実践型」があり、学年及びカリキュラムの種類によって特徴が違うので、上記7点の成果を生かしてカリキュラムを編成しなければならないというのが結論であった。

第3節 研究第3年度（昭和29年度）の実験研究

第2年度の経験統合の実験に次いで、第3年度は、次の教科及び諸活動の位置づけについての実験研究である。第1に用具教科・基礎教科のカリキュラムにおける位置づけ、第2に創造的表現の図画・音楽、第3に奉仕活動・クラブ活動・行事活動・児童会活動など教科以外の活動、第4に諸種のガイダンス活動、第5に健康保健、そして第6に情操教育・道徳教育・生産教育などをどのように位置づけるか、残された課題であったが、これらも含めてどうにかカリキュラムが編成された。最終結論として、「全体計画構想は、生活性（課題性）・系統性・実践性を重視した教育課程を構成することにある」と総括されるが、この結論への過程で、3種のカリキュラムを比較検討しているので、これに注目したい。

3年の研究の果てに次のような比較表を作成し、「複合型」カリキュラムを選択するに至った。図表14「3種のカリキュラムの比較」は17の観点からなされ、第1「児童の興味欲求の満足」、第2「児童の成熟度や経験的背景への適合」、第3「児童の問題意識」という3点は、いかにも経験主義らしい児童のニーズが挙げられている。例えば、第3点について、「経験型」カリキュラムは「生活課題に対する意識はかなりはっきりしている。かつそれが統合的である場合が多い」という評価で、これに対して「教科型」カリキュラムは、「高学年になると、教科的な問題意識はかなりはっきりとする。それが並行的分裂的な傾向になることがある」と指摘され、その点、「複合型」になると、「低学年は生活的であり、高学年はむしろ教科的傾向を示すが、おおむね統合的である」と高く評価されている。

同校はなぜ「統合的」あるいは「分裂的」であることにこだわるのか。そもそも学校教育法で「わが国の初等普通教育は、教科型の教育課程によること」として8教科が規定されているので、その教育内容の根拠は「文化」に求められ、「文化財を教育内容にふさわしいものにならなければならない」。「文化の中核となっている知識、技能及び諸活動を、教育目的に即して整理し、それを、類型化し、分析する。これが教科」である。各教科は分科して、「各教科独自に知識、技能を系統化する」。しかし、「文化」は元来「強固な統合体」である。これを無視して、「分科方式に固執して、各教科が、体系的な価値を独立的に追究することのみに専念したとすると、そこには、各生徒児童の内部に、価値の分裂が起り、現在の文化を統一的に体認し、新しい文化を創造するという機能は消失してしまう」。教科は「文化的価値を分担」しているので、「分科しつつも、常に全体とのつながりを意識して、価値追究を行なうことが重要」である。「低学年において、経験型の学習を加味すること、中高学年において、他教科との緊密な連絡を考慮すること、その他、学校行事、特別教育活

図表 14 3種のカリキュラムの比較

観 点	第1部 (経験)	第2部 (教科)	第3部 (複合)
1. 児童の興味欲求の満足	低い高学年を通じて満足感を与えやすい	高学年になると、教科の論理性がこどもを満足させることがある	低学年はおもしろいが 高学年はおもしろくない も興味である
2. 児童の成熟度や経験的背景への適合	できるだけ適合しようと努力している	教科の目標に照して適合をできるだけ考える	こどもの心理的発達と、論理的発達のバランスを考慮して適合につとめている
3. 児童の問題意識	生活課題に対する意識はかなりはっきりとしている。かつそれが統合的である場合が多い	高学年になると、教科的な問題意識はかなりはっきりとする。それが並行的分裂的な傾向になることがある	低学年は生活的であり、高学年はむしろ教科的傾向を示すが、おおむね統合的である
4. 社会的要求への適合	現実の社会の要求を学習の中へ比較的導入しやすく適合しやすい	各教科の目標に適合する傾向が顕著である	むしろ教科的目標への適合の傾向が強い
5. 生活態度の変容	自主的、責任、協力などの社会性は、長い間には養われる。(短期間では目立たない)	長期間にわたると、受動的態度が目立つようになる	指導に留意すれば、よい生活態度が形成されるが、一般的には2部的になって受動的になる場合がある
6. 自然及び社会的環境に対する理解	統合的に理解できる利点があるが、計画がよくないと自然と社会とのバランスがとれなくなる、系統性に欠けがちである。	系統性が強く理解は徹底しやすいが興味でなくなる場合がある	1～2部の中間である
7. 生活環境に対する適応の技能	生活に対する考え方や、処理のしかたが手ぎわよくなってくる	各教科で、特に留意すれば技能的に高めることができる。無関心の場合は1部より劣る	低学年の場合、習慣形成としてかなりうまくできる。高学年になると2部と同様な傾向がみられる
8. 問題解決のための技能の習熟	こどもは自主的にかなり習熟する	社会科及び理科においてはかなり養うことができる	2部と同様である
9. 基礎的理解および技能の獲得と習熟	教師が特に留意しないと、低下する傾向がある。機会をふやす必要がある	総体に平均してすぐれている。練習のための機会をとらえやすい	低学年については1部のような傾向がみられる。他は2部と同じ
10. 実践的活動との連関	低学年においては習慣形成はかなりうまくいく。高学年においては実践的でなくなる場合がある。奉仕、クラブ児童会行事活動などは単元と結んで扱いやすい	教科と教科以外活動とのむすびつきはなかなか困難である。一般的には実践性に欠けやすい	低学年については1部と同様、高学年については2部的である
11. 美的、情操的心情の深化	深化のきっかけは生活の問題としてとらえやすいが、深化することはなかなか困難である。	こどもの心理に即して、問題をとらえることは1部より困難であるが、深化することは1部より容易である	問題はあくは1部のようにし、深化は部分的に行なうことができる
12. 学習の統合性	単元構成が適切であれば、こども自らが経験を統合することができる	各教科の教材の統合であって、教師がその中心となる。統合について子どもは受動的である	原則的には、こどもみずからの経験統合であるが、時には2部的傾向に走る場合もある
13. 学習の連続性	1つの学習経験が他の経験へと連続しやすい、単元から単元、問題から問題が内容的にスムーズに流れやすい	各教科の系列によって連続しやすい。したがって、理解の面でははっきりとする	低学年には経験から経験への連続性が強く、高学年においては、系列から系列への傾向が強くなる
14. 学習の弾力性	きわめて弾力性にとむが、はっきりとした計画と目標をもたぬと学習が分裂状態となる	弾力性に乏しいがそれだけにあらかじめ計画したコースを確実に学習できる	弾力性はかなりあるが1部ほどの弊害は伴わない
15. 学習の能率化	学習形態を工夫しないと時間の浪費の割に効果的でない結果になりやすい。しかし興味であるから指導法の工夫によって能率化できる (特に高学年)	時間区分がはっきりとしているから能率的に進行しやすい。時に興味でないこともあるから、負担が荷重になることがある	低学年は能率的であるが、指導法の工夫が必要である。高学年では単元と教科の学習を区別して特徴を生かせば能率的である
16. 学習資料及び施設環境の利用	利用が広はんであるから効果的にするためには、かなりの工夫が必要である。(特に教科書) 反面身近なものを有効に利用できる	学習の内容がかなり、はっきりしているため、利用計画は立てやすい。反面教科書や教具にとらわれやすい	1～2部の中間である
17. その他学習指導上の特徴	導入が生活に即して有効的に行える学習計画が自主的にできる。学習の自己評価が得意やすい	導入が断片的である学習の見通しは立てやすい計画はどうしても教師中心になる。評価も教師中心になりやすい	単元学習については1部的 教科学習については2部的 } である

動等において、分科性のかもしだす欠点を補う必要が生まれる」という。3種のカリキュラムの比較評価では、この意味で、「統合的」であるか、「分裂的」であるかを問題にしているのである。第12観点で「学習の統合性」が問われ、「経験型」は「単元構成が適切であれば、子ども自らが経験を統合することができる」、「教科型」が「各教科の教材の統合であって、教師がその中心となる。統合について子どもは受動的である」と評価されている。その代わり、第13観点「学習の連続性」と「学習の能率化」では、「教科型」が、「各教科の系列によって連続しやすい。したがって理解の

面でははっきりとする」, 「時間区分がはっきりしているから能率的で進行しやすい。時に興味的でないこともあるから、負担が荷重になることがある」と評価され、「経験型」では、「連続しやすい」が、「学習形態を工夫しないと時間の浪費の割に効果的でない結果になりやすい。しかし興味的であるから指導法の工夫によって能率化できる」という評価である³⁸。

同校の結論としては、「総体的にみて、経験型カリキュラムに利点が多い」。ただし、「実践性・統合性・連続性・弾力性・能率性等に関して、未解決の点が少なくない」, 「教科型カリキュラムにおける系統性にも大きな利点」があり、「生かすべきところに集中的に生かし、学習の能率化を図ることが有効」である。他面、「どのカリキュラムにおいても、美的情操心情の深化について、あまり効果を発揮していない点」が問題で、「実践性の問題と関連がある」と捉えている。「経験型」ですら、「高学年になると、問題解決は知的な面に限定され、極端な場合は、単なるインフォメーションのみを追いかけ」るなど、「実践活動が全然遊離してしまう傾向が見える」という。「実践性のうすらいだ学習は、断片的な知識のよせ集めで、豊かな人間性を裏づける美的心情や、情操も欠く結果となって、真の学習とはなり得ない」。「社会・学校の行事活動、奉仕活動、クラブ活動、児童会活動その他学習に伴う実践的諸活動が再検討され、より実践性を強調する改善が必要である」というのである³⁹。要するに、同校は、分裂しがちな教科学習や欠落しがちな情操教育をいかにして統合するか、という「統合」の問題を重視しているのである。

そのような検討を経て、最終結論は、「生活性（課題性）、系統性・実践性」を重視したカリキュラムとなり、次の3点にまとめられた。

- ① 新しい全体計画の基本型は、経験型であって、問題解決の活動を中核とする。これによって、学習の統合を高度で強力なものしなくてはならない。
- ② 教科型の特徴である系統性を効果的に生かすものでなくてはならない。
- ③ 情操性と実践性を強化することに留意し学校生活における実践的諸活動をすべて組織する必要がある。

この結論に基づいて、図表 15 「新たな構想によるカリキュラム」が作成された。それは①②③に対応して、(1) 問題解決の層、(2) 基礎技能、そして (3) 日常実践の層という3層構造のカリキュラムである。(1) は「社会生活に適応する場であって人間の営むさまざまな社会生活と、その背景をなしている自然環境にまつわる問題をとらえさせ、それを解決することによって、社会生活についての理解や技能を学び取らせようとするもので」、「問題（解決）課程」とされた。(2) は「民主的な生活に必要な基礎的な技能を一つ一つ周到に育てる場であり、日常の実践活動、社会的自然的問題解決のための基礎的技能を獲得するもので」、「基礎課程」とされた。「この課程においては、数量形、言語、音

図表 15 新たな構想によるカリキュラム

日常実践		問題解決		基礎技能					
実践課程		問題課程		基礎課程					
日 常 課 程	常 時	定 時	随 時	Ⅱ 理 科 的 単 元	Ⅰ 社 会 的 単 元	Ⅳ 体 育	Ⅲ 家 庭	Ⅱ 音 楽 ・ 図 工	Ⅰ 国 語 ・ 算 数
	奉 仕 活 動	ク ラ ブ 活 動	行 事	随 時 活 動	綜 合 単 元				

楽、造形的表現、家庭生活、保健体育等に関する基礎技能を習得」させるもので、「各教科のもつ、系統的、基礎的要請を満足させる」課程であるという。(3)は「日常的な実践を通して、実行力のある実践人を育てる場であって、学校及び学級における集団生活によって民主的な人間関係のあり方を学びとらせようとする」もので、「実践課程」とされた⁴⁰。

結 論 学習指導要領改訂に果たした役割

東京学芸大学附属世田谷小学校が開発したカリキュラムは、「複合型カリキュラム」であると自ら捉えていた。それはコア・カリキュラムと教科カリキュラムとの中間に位置するが、コア・カリキュラムの変型である広域カリキュラムではなく、教科カリキュラムの変型である。開発されたカリキュラムを見れば、「基礎課程」は図表 15 では 4 領域に束ねられてはいるが、その実質は学習指導要領に沿った 6 教科が並立する教科主義で、かつ「問題課程」は社会科と理科の並立である。6 教科のⅠⅡⅢⅣの 4 領域は、昭和 26 年改訂の分類をそのまま踏襲している。最終的に提案された図表 16「実験成果による週時間配当表」は、学習指導要領の総時間数を参考に配分したということである。

また「実践課程」の内容は、学校行事・クラブ活動・奉仕活動を中心とした「教科以外の活動」そのものである。説明では、「これは日常的な実践を通して、実行力のある実践人を育てる場であって、学校および学級の集団生活によって、民主的な人間関係のあり方をじかに学びとらせようとするのである」とされ、そのために「日常の規律を申し合わせるとか、行事を計画するとか、学級新聞を作る相談をする」などが挙げられているが、前述のように「4 月 計画を立てて進んで実行しよう」、「11 月 きまりを進んで守ろう」など、生活指導的側面が強く、特に「民主的」なあり方は追求されていない⁴¹。

同じく文部省実験学校であった福沢小学校の報告書には、「昔通りのしつけ」と「民主的社会における道徳」との違いについての追究と実践が見られたが⁴²、附属世田谷小学校の場合は、むしろ「昔通り」に近く、学級児童会は編成されても生徒の自主的な活動を活発にする生徒「自治」会を育成する積極性は見られない。むしろ全体に奉仕する児童生徒像が志向されていたと捉えられる。

総じて、同校の第 2 期実験研究では学習指導要領の基準に収斂する仕方でカリキュラム開発が進められたと言える。「わが校の全体計画は、経験型」と宣言しているが、実は、この課程で最も重視したのは、説明の行

数が少ない基礎課程である。基礎的な知識・技能の反復練習など、いわゆる基礎学力形成をおろそかにしないカリキュラム編成であっ

図表 16 実験成果による週間時間配当表

学年	課程		基礎課程							実践課程	計
	問題	社会的	理科的	国語	算数	音楽	図工	家庭	体育		
1	4	2	6	3	2	3	/	3	4	27	
2	4	2	6	4	2	3	/	3	4	28	
3	5	2	6	4	2	3	/	3	5	30	
4	5	3	7	5	2	2	/	3	7	34	
5	6	4	7	5	2	2	1	3	9	39	
6	6	4	7	5	2	2	1	3	9	39	

た。「児童の自発的な家庭学習にあっても、計画をたてやすく、学力低下を防ぐ一つの対策にもなっている。この方法を続けることによって、確実性のある基礎学力が身に」つけることができると説明された⁴³。分科した教科教育を重視すればこそ、「分裂的」であることが懸念され、「統合的」な方策として「実践課程」と「問題課程」の重要性が力説された。要するに、「基礎課程」における基礎学力形成を基盤としつつ、いかにして生活経験とをつないだ学力にするか、この問題を追究したのであった。

カリキュラム開発の実質は教科を崩さない教科主義に立って問題解決学習や日常活動を採り入れる方式であったので、多くの学校にとってはモデルとして利用しやすかったものと思われる。本格的なコア・カリキュラムを導入するなら、ラディカルな民主主義の実践とカリキュラムの抜本的改革とが求められるので、これを実践する学校となることは思想的にも実践的にもリスクであったが、同校のように、コア・カリキュラムに嵌らない経験主義風の穏健なカリキュラムは、教育の実際と思想性において安全であったと評価されたに違いない。小学校学習指導要領担当者であった文部事務官木宮乾峰は、学習指導要領の解説において、「教科の組織を頼りにして、いろいろな経験の指導をする方がやりよいのではないか」と提案しており⁴⁴、同校のカリキュラム開発はその線に沿うもので、文部省としては望ましい一つのモデル開発を得ることになったのである。

【註】

- 1 拙稿「戦後改革期における文部省実験学校の研究成果—東京高等師範学校附属小学校の3種のカリキュラム開発—」, 早稲田大学教育学研究科『紀要』25号 2015年3月
- 2 東京学芸大学附属世田谷小学校『わが校90年のあゆみ』昭和41年3月 328～329頁。以下、「シーケンス」は引用以外は「シーケンス」, 「コア」は「コア」として使用する。
- 3 東京学芸大学第一師範男子部附属小学校『カリキュラムの実験シリーズ I カリキュラムの構成と実際』『カリキュラムの実験シリーズ II 学習環境の構成と実際』, 『カリキュラムの実験シリーズ III 低学年カリキュラムの実際』, 『カリキュラムの実験シリーズ IV 中学年カリキュラムの実際』, そして『カリキュラムの実験シリーズ V 高学年カリキュラムの実際』 いずれも学芸図書 1949 (昭和24)年12月
- 4 前掲『カリキュラムの実験シリーズ I カリキュラムの構成と実際』9～10頁
- 5 前掲『わが校90年のあゆみ』334頁
- 6 前掲『カリキュラムの実験シリーズ I カリキュラムの構成と実際』6頁
- 7 同上書 22～23頁
- 8 同上書 35頁
- 9 同上書 32～34頁
- 10 22～23頁
- 11 同上書 42頁
- 12 前掲『わが校90年のあゆみ』301頁, さらに文部省『小学校社会科 学習指導要領補説』(昭和23年9月15日)では, (1) 生命・財産および資源の保護保全, (2) 生産・分配・消費, (3) 運輸・通信・交通・交際, (4) 美的および宗教的欲求の表現, (5) 教育, (6) 厚生慰安, (7) 政治の7領域が提案されている。8～9頁
- 13 前掲『カリキュラムの実験シリーズ I カリキュラムの構成と実際』43頁
- 14 前掲『わが校90年のあゆみ』300頁
- 15 前掲『カリキュラムの実験シリーズ I カリキュラムの構成と実際』43～44頁

- 16 同上書 44～45頁
- 17 同上書 46～51頁
- 18 同上書 68～71頁
- 19 同上書 76頁
- 20 同上書 81～86頁
- 21 同上書 71頁
- 22 同上書 「算数基礎学習案」82～83頁, 72～73頁
- 23 前掲『カリキュラムの実験シリーズ II 学習環境の構成と実際』昭和24年12月1日 67～68頁, 『カリキュラムの実験シリーズ I』98～100頁
- 24 前掲『カリキュラムの実験シリーズ V 高学年カリキュラムの実際』159～160頁
- 25 拙稿「戦後改革期における文部省実験学校の研究成果—東京高等師範学校附属小学校の3種のカリキュラム開発—」, 早稲田大学大学院『教育学研究科紀要』(第25号) 2015年3月
- 26 前掲『カリキュラムの実験シリーズ I カリキュラムの構成と実際』179～186頁, 奈良女子高等師範学校附属小学校学習研究会『たしかな教育の方法』秀英出版 昭和24年5月
- 27 前掲『カリキュラムの実験シリーズ V 高学年カリキュラムの実際』108～114頁
- 28 同上書 115～117頁
- 29 前掲『カリキュラムの実験シリーズ I カリキュラムの構成と実際』177頁
- 30 愛知県幡豆郡西尾町立八ツ面小学校「わが校のカリキュラムと自由研究指導の計画と実施」(野瀬寛顕編著『1949年版 実験報告 カリキュラム構成の技術』小学館 昭和24年4月) 215～218頁
- 31 前掲『カリキュラムの実験シリーズ V 高学年カリキュラムの実際』178頁
- 32 同上書 127～128頁
- 33 前掲『わが校90年のあゆみ』331～332頁
- 34 初等・特殊教育課長上野芳太郎「まえがき」, 文部省『初等教育研究資料第XⅢ集 教育課程 実験学校の研究報告』明治図書 昭和31年9月5日 1頁
- 35 同上書 3頁
- 36 同上書 5～7頁
- 37 同上書 7～8頁
- 38 同上書 19～20頁
- 39 前掲『わが校90年のあゆみ』414～415頁
- 40 前掲『初等教育研究資料第XⅢ集 教育課程 実験学校の研究報告』24～26頁
- 41 同上書 24頁, 33頁
- 42 同上書 「第Ⅱ部 神奈川県足柄上郡南足柄町立福沢小学校」105～178頁
- 43 前掲『わが校90年のあゆみ』424頁
- 44 文部事務官木宮乾峰『小学校教育課程の解説』新光閣 昭和26年4月15日 12頁